

マタイ 3:1-12 「心を神に向ける」

「そのころ、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言った。これは預言者イザヤによってこう言われている人である。『荒れ野で叫ぶ者の声がする。「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」』 ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜とを食べ物としていた。そこで、エルサレムとユダヤの全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けた。ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、バプテスマを受けに来たのを見て、こう言った。『蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。

「我々の父はアブラハムだ」などと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水でバプテスマを授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちにバプテスマをお授けになる。そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる』

バプテスマのヨハネは、主イエスキリストが十字架の道を行かれるための、道備えをした人です。

主イエスキリストは、わたしたち、すべての人間の罪を身代わりに背負って、十字架にかかり、死んでくださいました。主イエスの犠牲の死。それにより、わたしたちの罪、わたしたちのひとつひとつの罪、わたしたちの具体的なひとつひとつの詳細な罪、それらの罪すべてが、つぐなわれたのです。罪の赦しが、与えられるのです。主イエスキリストの十字架は、まことに、わたしたちの救いの源です。

ですけれども、もし、わたしたちが、主の十字架を個人的な「信仰」をもって受け取る、ということをししないのならば。もし、わたしたちが、主の犠牲は、

このわたしのためであるという個人的な「信仰」をもって、十字架を見上げるのでないならば、わたしたちは、救いを受けることは、出来ないのです。「ああ、ほんとうに、わたしは救われた」という、この動かし難い実感を、地上に生きている間に、喜びをもって味わうということが、出来ないのです。

主の「十字架」は、必ず、その十字架を受け取る、わたしたちの「信仰」と、結び合わされなければなりません。ただ、主の十字架だけがあって、そこに、わたしたちの信仰がないならば、わたしたちは救われることができません。逆に、わたしたちの側に信仰があって、そこに、主の十字架の出来事がないとするならば、やはり、わたしたちは救われることはできません。主が十字架にかかれたという事実と、その事実を、自分のためのこととして信じるという、わたしたちの信仰と、この二つが結びつけられて、初めて、わたしたちは救われるのです。

このような信仰を持つ人々。主の十字架を信じる一群の人々を、主の御前に用意すること。これこそが、バプテスマのヨハネに課せられた使命でありました。バプテスマのヨハネは、人々を「信仰」へと導きました。それは、具体的には、人々を「悔い改め」へと導くことでありました。なぜなら、「悔い改め」こそ、十字架を見上げるわたしたちの信仰の根幹を成すものだからです。

いったい、自分の罪を認識しない人というのは、主の十字架の必要性を、みじんも感じません。みじんどころか、十字架の必要性をまったく感じないのです。自分の罪を認識しない人は、主の十字架が何であるのか。それがいったい、何のためであるのか。誰のためであるのか、ということが、まったく理解できません。

しかし、主の十字架の必要性を、心の底から痛切に感じる人たちがおります。主の十字架の恵みに、心からよりすがろうとする人たちがおります。主の十字架にすべての望みを置こうとする人、置かずにはおられない、という人たちがおります。それが、「心を神に向ける」人。自分の罪を認識している人です。自分の罪を認識している人だけが、主の十字架の必要性を、心の底から痛切に感じることができるのです。

自分の罪を認識すること。神の怒りが自分の上にあると感じること。自分の罪を自分ではどうすることもできずに、無力を感じる。自分の罪深さにおののくこと。これこそが、「福音」のはじめであります。ただ、罪に悩む人々だけが、よく、十字架の恵みにあずかることができるのです。

バプテスマのヨハネのもとには、二種類の人々が、やって来ました。第一は、民衆。第二は、ファリサイ派やサドカイ派などの宗教家でありました。

第一の人々は、民衆でありました。彼らは、自分の罪を認識しておりました。彼らは、神の怒りが自分の上にあると感じておりました。彼らは、自分の罪を自分ではどうすることもできず、無力を感じておりました。彼らは、自分の罪深さにおそれおののいておりました。それゆえ、彼らはバプテスマのヨハネのもとに来て、悔い改めの祈りをささげました。「心を神に向ける」祈りをしたのです。

第二の人々は、ファリサイ派やサドカイ派などの宗教家たちでありました。バプテスマのヨハネは、宗教家たちを「蝮の子ら」と呼び捨てて、批判しました。実際のところ、彼らは、それほど罪深いようには見えませんでした。彼らは、取税人ではありません。売春婦でもありません。大酒飲みでもありません。彼らは、熱心に自分たちの宗教の外形的な標準を守ろうと努力している人々でした。聖書の専門家であり、また、神殿の儀式の専門家でありました。彼らは、自分たちの宗教の外形的な標準と形式を、いささかの落ち度もなく維持しようと努めていました。また、実際のところ、落ち度なく維持でしていたのです。

宗教家たちは、宗教の外形的な標準を維持していました。しかし、彼らの心は、必ずしも神に直結していなかったのです。

いったい、自分の罪におそれおののいて、神の御前にひれふし、十字架によりすがる人というのは、その心が、神に直結させられるのです。なぜなら、その人は「悔い改め」を通して、自分の心を神に差し出しているからです。悔い改める人の心を、神は、十字架において、受け取ってくださいます。

宗教の外形的な標準を維持するだけで、自分自身に満足してしまうという人は、実のところ、心が神から離れてしまうのです。その人には、自分を悔いる、ということがなく、神の前におそれおののく、ということがなく、自分の無力を悟る、ということがなく、ひたすら神のあわれみによりすがる、ということが、ないからです。

バプテスマのヨハネは、宗教の外形的な標準を維持して満足しているファリサイ派やサドカイ派を批判して、「蝮の子ら」と表現しました。

わたしたちに必要なことは、宗教の外形的な標準の維持に努めるだけではなく、静かに自分を省みることです。「木の根元に斧が置かれている」とバプテスマのヨハネは告げました。わたしたちは、自分の外側の行ないだけではなく、自分の内側の心の思いを、神の御言葉の剣の前に、置くべきです。神の御言葉の剣の前に、自分の心の思いを置いて、静かに省みるときに、わたしたちは心が刺されるであります。他人が外側から見ただけでは決してわからない、自分だけが知る、自分のあるがままの姿を、見つめさせられることになるのです。

しかし、気をつけなければならないのは、わたしたちが、自分を見つめて、さらに、自分を見つめ続けるとしたら、そこにあるのは、絶望だけである、ということです。わたしたちは、自分を見つめ続ければ続けるほど、絶望するほか、ありません。ただひたすら、自分を見つめ続けるだけであつたら、わたしたちは死んでしまうでしょう。わたしたちは「信仰」に立たなければならないのです。

わたしたちは、「信仰」に立たなければなりません。神のひとり子、主イエスキリストが、わたしの罪をすべて身代わりに背負って、十字架に死んでくださった、と信じるのです。主イエスの犠牲の死。それにより、わたしの罪、わたしのひとつひとつの罪、わたしの具体的なひとつひとつの詳細な罪、わたしの罪のすべてが、つぐなわれた、と信じるのです。わたしの罪は赦された、と信じるのです。主イエスキリストの十字架こそ、ほんとうに、わたしの救いの源である、と信じるのです。

このような「信仰」に立つ瞬間、わたしたちは、自分の心を、十字架を通して、神に差し出しています。神は、そのようなわたしたちの心を、受け取ってください。こうして、わたしたちの心と神の心が、直結されるのです。

わたしたちは、さらに「信仰」に立つのです。主イエスキリストが十字架にかかり、三日目に復活されたとき、わたしもまた、キリストに結ばれて、キリストと共に、復活の命へもたらされたのだ、と信じるのです。それは、聖パウロが次のように言うところの「信仰の奥義」です。

「あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないようにしなさい。あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう」(コロサイ 3:1-4)

このような「信仰」に立つ瞬間、わたしたちは、自分の心を、復活を通して、神に差し出しています。神は、そのようなわたしたちの心を、受け取ってください。こうして、わたしたちの心と神の心が、直結されるのです。

わたしたちの心と神の心が直結された結果が、「聖霊のバプテスマ」です。わたしたちの心と神の心が、隔てなく、ひとつに結ばれるとき、神の命である「聖霊」が、わたしたちの心に注がれて来ます。聖霊は、わたしたちを生かす命となってくださいます。こうしてわたしたちは、この地上の人生において、実感することができるのです。「ああ、ほんとうに、わたしは救われた」という、この動かし難い実感を、いまここで、喜びをもって味わうことができるのです。

わたしたちの心は、神の心と直結しているのでしょうか？ 「ああ、ほんとうに、わたしは救われた」という、この動かし難い実感を、わたしたちは今日、心の中に味わっているのでしょうか？ お祈りいたしましょう。

祈り

天の父なる神様。

あなたが求めておられるのは、悔いなくおれた心です。

どうか、聖霊の光の中で、自分を静かに省みる事が、できますように。

御言葉の剣の前に、自分の心を静かに置く事が、できますように。

自分の罪に気付かされたとき、どうか、わたしたちが「信仰」に立つことができますように、「信仰」を与えてください。

どうかわたしたちに、「信仰」を与えてください。

主イエスが十字架で死なれたのは、ほんとうに、このわたしのためであった、と心の底から信じることのできる「信仰」を、わたしたちに与えてください。

主イエスが三日目に復活されたとき、ほんとうに、このわたしもイエスに結ばれて、イエスと共に復活させられたのだ、と心の底から信じることのできる「信仰」を、わたしたちに与えてください。

すべては、信仰に始まり、信仰を経て、信仰へと至ります。

すべてのことは、信仰によって、実現せられます。

どうか、主イエスキリストの十字架と復活を通して、わたしたちの心を、神の心と直結してください。

わたしたちの心を、神の心と、隔てなくひとつに結んでください。

わたしたちの心の中に、聖霊を豊かに注いでください。

聖霊。どうか、わたしたちの心の中に、満ちてください。

「ああ、ほんとうに、わたしは救われた」という、この動かし難い実感を、今日という日、いま、この瞬間、この場所において、心の中に、経験させてください。心からお願いいたします。

わたしたちの主イエスキリストの御名を通して、お祈りいたします。

アーメン